

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 147号

平成26年7月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (9)

(「石館守三先生金曜会語録」より (4))

Great Man とは

“Great Man “とは。内村先生の偉大という定義は、時間とともにますます輝いてくる。この世に於ける神の審判を見るとすれば、それは「時間」であろう。自分が正しいと思ったことでも時を待つこと。時の審判が大切である。

「一芸に秀でる」ということはよいこと。その道の expert になるなら精神もある宗教的境地に達する。アインシュタイン曰く「世の人は私を天才だというが、これは非常な誤り。私が多少の独自の立場を見出したのも、全精神をその中に打ち込んで使命感に徹したから」 使命感に徹せよ。自分の名誉心、功利的気持ちであれば「時」の審判に耐えまい。 (昭和40年10月22日 金曜会)

やむを得ず引っ張り出される仕事

ライの病院に入ろうと若い時に考えた。薬がまったく 2000 年来のままで治療がなされているのを知ったからである。しかし私の親や先生が説得してやめたのである。ヒロイズムの気持ちも強かった。一生を人が捧げることが出来るのは心の底から生まれたものなのである。青年時代に人は特にエゴイズム、ヒロイズムが強い。待つべきだ。なすべきことは与えられるから。ただし社会がまた何を望んでいるかについて考えることも必要であろう。あせることはない。

私の先輩の話を知ったりしてみると、人のなしていることというのは、無理に任せられたものであることが多いのではないかと。自分の思い通りにしようと思いつつやむを得ず引っ張り出され、それが大きな仕事に結びつくことが多いのではないかと。また人がどんな仕事を持つか、それぞれの人により呼びかけが異なるのである。

昔の武士、封建時代の人間は、死について考えるのが早かったため、早くも 16 歳で大人となった。死を前にした生活、昔の人の生活は真剣だった。20 歳前にして、人生すべきことを持っていた。今は呑気だ。特に日本は孤立した国だからなのか。呑気であり、人生の考え方、社会観がなかなか訓練されていない。

ドクターシャープと話した時に、自然科学者である私に特別に言ったのか、次のように述べた。人は科学により自然をコントロールしている。しかし人間の心は誰が change しているのか。一体人間のエゴイズムは変わっているのか。社会が変わり自然が変わっても、人間は同じものを追い求め、昔に変わらず争っているのではないのか。現代の悩みもそれではないのか。新しく生まれ変わらねばならぬ。心から新しく作り変えられねばならぬ。

(昭和 40 年 11 月 5 日 金曜会)

自慢話

一つ自慢話をする。近く勤めが変わるので研究所で送別旅行をした時別れのあいさつをした。すると意外にも「私に一つ挨拶をさせて下さい」と私の運転手が言って話をした。「私は会社に5年、先生の運転手を4年10ヶ月位。その前は流しや円タクなどをやっていた。が先生についてから今頃皆からほめられるようになってきた。大分前と人が変わったという。私は先生の行動は朝から晩まで知っている。家のことも皆知っている。そしてこんな生活があるのかと別世界を見せ付けられた気がしてきた。(彼らから見るとそう見えるのである。)車の中で聞く話も今までに聞いたことのない話である。(彼はすっかり驚いてしまったらしい。)どうも5年間ありがとうございました。

我々も生まれながらの人間の哲学も限られたものであり、知らず知らずのうちに型にはまってしまう。キリストは何を私に示したか。それは人間の尊さということであるが、その意味で同志会に入った価値があるのである。

(昭和40年日11月26日 金曜日)

出会い

昨夜飛行機で帰ってきた。今後も3月まで会うわけだから折り目をつけて話さなくてもと思うが、しみりした話なので、一つの感話。

同志会の存在意義は人に会うこと。人は友を持たなければならない。人と人との関係がない場合は危険な状態に陥る。ロンドンで立派な Church (教会) がそびえる。夜ホテルの近くで遊びがある。タイでは人間が充満している。何のために生きているかは分からぬが、Developing Country (開発途上国) のために何が必要かという目的で洋行したのだが、それらの人々も神の子として生きているとみる時人間を発見した。

外国では墓場がきれい。「この人を見よ」と墓碑銘にあった。一人では私たちは墮落する。出会いの中でよりよきものを見つける。そして神の子を見よ。その人に会うことが最高の喜びである。そこに愛、人と人とのつながりがついてくる。何かを求めよとここで要求するのは無理、ただ出会い。

(昭和41年6月17日 金曜日)

人生有難し、キリスト教出合い難し

夏休みを有効に過ごせ。唯一つの提案がある。つまり上の話をじっくりと時間をかけて考え、何が真実か、何に身を任ねるかをじっくり考え求めることをして欲しい。いくら考えても50年ぐらいたたねば分かるまいが、そのような態度をもって臨まねば人の話が分からない。多くは望まぬが、この一つのことを望む。

青年時代はとにかく夢を追い、愛の対象を求める。ともすれば動物利己的になる。我々は何に惚れて一生を過ごすかが問題である。私は同志会にいたお陰でそれを踏み誤らなつた。人生は有難し、ましてキリスト教出合い難しである。どうかこの意味を十分考えて欲しい。人間の生長過程において高い所から人生を眺めようとしなくて欲しい。この間現代の最高の学者たちと歓談したが、旧教、信教の区別さえ知らぬのに驚いた。

最近の中東情勢にかんがみ、ユダヤ民族の誇り、覚悟の程をうかがい知ることができる。若いユダヤ人は自らをユダヤ人として誇る。特別民族の意識が彼らを偉大な業績を残さすとも言える。

(昭和42年7月7日 金曜会)

自然科学と宗教の違い

自然科学の取扱う問題と宗教の取扱う問題は分けられるべきだが、ある程度ぶつかり合う。Cross (交叉) する。自然科学は物質を認識しうる範囲で探求する。宗教は精神界の原理。

人間は精神活動するもの。それが人間を他の動物から分けるもの。それを支配する原理を司るもの→聖書。聖書は自然界のことを書いたものではない。科学的分析を試みれば矛盾だらけとなる。

科学は価値判断のあり得ない世界。客観的真理。科学者は人間、価値判断をしなければならない。科学の発展……盲目的であり、無目的である。しかも加速度的である。人間がそれを control 出来ないで困っている。たとえば戦争利用、科学者のなすべきこと、科学を如何に位置づけるか、しっかりした価値判断が出来ねばならぬ。そういう意味でよい科学者は同時に良い宗教者（信徒）でなければならぬ。ダーウィンの進化論、ファーブルの昆虫記。ダーウィン説に観察をもって反論。自然科学の真理は絶対の真理でなく説にすぎぬ。

(昭和42年9月22日 金曜日)

永遠に目を向け、この世のことをする

これからの人生を希望を持って進んで行く。法律を学び幸せな家庭を築く。そういうものに本当の平安と喜びがあろうか。法律にも科学にも音楽にもそれのみを打ち込むことに真の平安があろうか。その中の本当の喜びがあろうか。私は科学者である故に喜びを持たぬ。10年たてば私の見つけたことなど古い。普通の人があるの中に持つような恋、平和などのものに喜びはない。別なところから来る。それは信仰だ。私は真なり、道なり、命なり。この言葉に接し、キリストの真、キリストの道、キリストの生命をキリスト様が与えようとした。それを常に思う。同志会にいる間その中に真がある、道がある、生命があるものに会い得るか考える。…

私は学問、芸術だけを追求したのでは駄目だ。永遠に目を向けこの世のことをする。何をしても無意味かもしれぬが、永遠を見てやったことは自分にとって生きる。不幸な人生を送った一人の人の方が特異な人生より人を生かす、必ず報われる。この世のためということでこの世の俗事を肯定する。真理を目指して初めて恋も生きる。失望してもらっては困る。

(昭和43年5月3日 金曜日)

キルケゴールの伝記

キルケゴールの伝記を読んで感銘した。42才で死んだのだが、真理を求める態度は立派なものであった。人間とは何か。何のために生まれたのか。そして人間らしい人間とは何なのかを死ぬまで問い続けた。そして結論としてキリストを仰ぐに至ったのである。

祖父が牧師、父は教会の長老という宗教的な雰囲気のある家庭に育ったがそれに対して反撥をし、また権威主義、教条主義に対して反問した。又早死にの家系であることにより「死」が身近にあった。…

自分の父は敬虔な長老であったが、母が死ぬと継母に家政婦で来ていた人がおさまった。そしてその継母と兄との関係などから…父の持っている信仰に対する疑問となって現れた。

当時科学勃興の時代であった。科学を礼賛することはたやすい。しかしそれらと自分とのかかわりは何か。自分の生きる目標、意味を見出さねばならぬと闘った。マスコミの非難にもめげず実存哲学なるものを打ち立てたのである。そして神学、信仰に対する大きな寄与をなした。人生への目覚めをどう受け止めて行くか。彼のそんな態度に感銘を受けた。諸君も是非読んでもらいたい。

(昭和43年6月28日 金曜日)

キリストに対する信仰に生きよ

同志会を去る諸君に何を話したらよいか。とにかく年を取っていることのメリットは大事なことを考えるようになるということです。年をとると高台にいるように視野が広がる。

私自身同志会に入った時キリスト教については全く無知でした。しかし何か人生の意味を知りたいと思って入ってきた。あの先輩がこう言ってそしてそれを実行している。この事実が印象に残るのである。若いときには見えるものに対して野心をいただく。しかしキリスト教の本質は復活にあるのだ。あの人が復活のことを述べ、そしてそれを真実として生きているという事実!! これが私と小西先生との縁になったのである。小西先生の復活一点張りの信仰は私にとって大きな感動であった。

私達が感動したものは何であったか。内村先生が命がけで福音と取り組んだ姿、これを見てこれこそ真実に違いない、ここに真理があるのだ、神があるのだということを単純に知ったのである。ミス・モークの命がけの生活を見て福音の本質を知りました。本当かも知らんという程度でよいと思う。私自身もよく分からなかったんだから。

諸君は夢を持っているだろう。何かやろうという志があるだろう。色々なことをやっても本当に残るのは真実を求めてやまなかった問う事実そのものである。阪井先生が残されたものは財産でも何でもない、同志会である。阪井先生のこの世での事業の大部分は消えてゆくであろう。しかし先生にとって本当の喜びは同志会を作ったことであったと思う。報いを望まず尽されてきた先生の精神に私も連なろうと思っているわけです。

私もアウシュヴィッツに行ったことがある。戦慄を覚えた。私達もいつこの世を去らねばならぬか分からない。この世に生を受けていることの意味を改めて考えたくなる。今命をとられたら何が残せるか、これを考えなければならないと思う。

自分もやはり歴史の中で人間としてなすことがあるという人生に対する思い、畏敬の念を心に持ちたい。真実を求めてキリストに対する、福音に対する信仰に生きることである。キリストの愛の中に生きたということを残すことが最良の遺産である。

(昭和44年4月11日 金曜会)